



from IUPS

IUPS2009 Scientific Program

IUPS2009 組織委員会副委員長
国内プログラム委員会委員長
IUPS 国際プログラム委員会委員長

倉智嘉久

第36回国際生理科学会議（IUPS大会）の開催が3年後と迫って来ました。この世界大会は100年を越える歴史を持つもので、全世界から多くの生理科学・関連領域の研究者が4年に一度集うものです。今回の大会は、日本では1965年以来44年ぶりの開催となります。この大会は生理科学における日本のプレゼンスを示す絶好の機会であるとともに、国際的な友好を育み今後日本の若い研究者が世界に向かって飛躍するためにも非常に重要なものだと思います。この目的を達成できるように、是非すばらしいScientific Programを組みたいものと国内・国際プログラム委員会の皆様とともに努力いたしたいと思っていますので、よろしくご協力・ご支援をお願いいたします。

IUPS2009 Kyoto大会のメインテーマは「Function of Life: Elements and Integration」です。これはポストゲノム科学の時代にまさに時宜を得たテーマであると思っています。これからの生命科学さらには融合領域研究における生理学の重要性は明白であり、IUPS2009をバネとして日本生理学会および関連諸学会が「生命素子とその統合としての個体」の生体機能科学を構築し、人類の未来のための学問を形成する時である、と思います。この理念にふさわしいScientific Programを実現することがプログラム委員会に課せられた使命であります。Good Science, Good Food, Good Culture, and Good Friendshipが大会成功の生命線です。IUPS2009をこれらが実感できる大会とし、世界の中での日本の生理科学の格段の発展をはかることが本大会を意義あるものとするこ

あると思います。

2001年にIUPS2009の招致が仮決定されてより、生理学会では学際化・国際化を目指してIUPSプログラム委員会企画シンポジウムなどを中心として様々な企画が試みられて来ています。年会の英語化が進み、韓国との共同シンポジウムの開催も定例化し、現在では生理学会国際交流委員会が毎年の企画を担当されています。Memorial Lectureや日本生理学医学研究者史のシンボも設定されました。2005年にSanDeigo大会ではIUPS2009が正式承認の運びとなりました。さらにこれらの試みを積極的に継続改良し、日本生理学会が真に国際化・学際化し、IUPS2009では日本の研究者がアジア諸国の研究者とともに世界に向けて様々な情報を思う存分に発信され、そのプレゼンスを示されることを願ってやみません。

さて、それでは、IUPS2009のScientific Programについて具体的にご説明したいと思います。プログラムの構成は以下の通りです。

1. Special Lectures 24
2. IUPS named Lectures 5
3. Symposia 42
4. Whole day symposia 12
5. Physiological Society of Japan (PSJ) Symposium 10
6. PSJ named Lectures 2
7. Ko-Ja-Ch symposium 1
8. Teaching and tutorials ~10
9. Work-shops ~10

各スロットをご説明しますと、Special Lec-

turesは読んで字の如くであり、各領域で世界を代表する研究者を招待して行っていただく講演です。本年1月20, 21日に開催しました第一回国際プログラム委員会 (ISPC) において16名の招待講演者が内定しました。これから招待状を出すことになりまだ確定した訳ではありませんが、Jeffrey Friedman (USA), Alfred Gilman (USA), Kenji Kangawa (Japan), Roderick Mackinnon (USA), Barry Marshall (Australia), Moo Ming-Poo (USA/China), Erwin Neher (Germany), Denis Nobel (UK), Bert Sakmann (Germany), Joe Takahashi (USA), Masatoshi Takeichi (Japan), Roger Tsien (USA), そして女性研究者として Fran Ashcroft (UK), Linda Buck (USA), Lily Jan (USA), Clara Franzini-Armstrong (USA) です。IUPSの領域でのノーベル賞受賞者などすばらしい研究者をご招待することになり、とても喜んでおります。残りの8名は来年12月に開催される第2回国際プログラム委員会で決定予定です。

IUPS Named LecturesはIUPS組織や構成Commissionがsponsorとなるlectureです。これらの講演者も第2回ISPCで決定予定です。

Symposiaは世界の関連学会(日本も含む)からの提案を受け、2nd ISPCにて決定されます。是非多くのご提案をお願いしたいと思っています。一つのSymposiumは2時間半として、計画された講演者に加え2名の講演者は公募により決定することになりました。(詳細はこれからとなります。)

Whole day symposia, PSJ symposia, PSJ-named lectures, Ko-Ja-Ch symposiumは日本側で主体的に決めるプログラムとして設定され、1st ISPCに提案し、了承されました。Whole day symposiaは朝から夕方まで一日かけるシンポジウムであり、PSJ symposiaは2時間半の時間枠を設定しています。これらは関連諸学会や特定領域などの諸グループが講演者にかかる経費の負担を行うとともにプログラム決定の主体となるものであります。プログラムは科学的なレベルを維持すると共に、講演者の半数くらい以上は海外か

らの講演者とする。講演者は地理的なバランスも考慮する。ということをお願いいたし、かつ内容の最終決定にはプログラム委員会の承認を必要とする、としております。これらの設定の目的は、関連学会などの主催により学際性の高いシンポジウムを増やすとともに参加者の増加を目指す。そして直接IUPS大会本部での予算負担を軽減する。というものであります。特にwhole day symposiaでは従来のSatellite symposiumの方々ができるだけCongress本体の中でその活動を行っていただき、開催Congress本体を盛大にする、ということを目指しております。これらのsymposiaにより、普段生理学会に出席されない専門領域の研究者により多く大会に参加していただき、21世紀の生理学が学際的に大いに発展するきっかけとなることを願っています。

PSJ Named Lecturesは昨年の生理学会仙台大会より始まったものをIUPSにおいても開催するものです。植物生理分野の田原淳記念講演と動物生理分野の萩原生長記念講演の2つを設定しています。これらのmemorial lectureにふさわしい講演者を国内プログラム委員会において選出したいと考えています。

Ko-Ja-Ch symposiumはアジアの生理学の交流を図る目的で設定しました。これはIUPS国際対応委員会(大森治紀委員長)がこのプログラム作成を担当される。今後アジアにおける研究交流と友好関係を推進し、世界に向かってアジアの生理科学研究を発信する機会となるようにするとともに、今後のアジア地域での研究・教育の交流が盛んとなる契機とすることを目指しています。

Teaching and tutorialsは半日をかけ、新しい領域、たとえばBioinformaticsやPhysiomeなどの主題を設定し、各Organizerによる演習などを取り入れた講習会形式のものを想定している。未だその詳細を詰め切るまでには至っていないが、1st ISPCにおいて既に多くの提案がなされた。今後プログラム内容を詳細につめる作業を行い、2nd ISPCにおいて決定する予定である。

Work-shopsは応募abstractから選んでシンポジウムを組むというものである。課題を設定して

おき，abstract submission時に発表の応募を募り，選考する予定です．若い研究者により機会を提供することを目指しています．

以上，IUPS2009のScientific Program作成の途中経過のご報告をいたしました．プログラムはまだまだ作成中であり，その基本は拡大国内プロ

グラム委員会において詳細なご検討をいただいておりますが，生理学会会員諸氏のご意見は大歓迎です．皆様とともに是非すばらしいIUPS2009大会といたしたいとおもいますので，よろしくご協力・ご支援・ご参加ください．